

明治期実録の研究：士族反乱ものを中心として

生住，昌大

<https://doi.org/10.15017/1440994>

出版情報：Kyushu University, 2013, 博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.



氏 名 : 生住 昌大

論文題名 : 明治期実録の研究—士族反乱ものを中心として—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

「事実の記録」を標榜し、江戸時代に盛んに読まれた「実録」と呼ばれる小説ジャンルがある。しかし、その名称とは裏腹に、実録は作中にフィクションを多く取り込んでいる。それゆえ、実録は虚妄の書と見なされ、歴史の重大事件を描きながらも、長らく等閑視されてきた。だが、実録が事実と虚構という表現の根本問題を抱えた読み物であることが認識されるにつれ、研究者の関心も徐々に高まり、高橋圭一『実録研究』（清文堂、2002年）を皮切りに、ようやくまとまったかたちでの研究の成果が提出され始めるようになっていく。

しかしながら、研究者の関心は多くの実録が書かれた近世期の実録に集中し、明治期の実録研究は、未だほとんど手つかずの状態である。しかし、実録を通史的に考える足場を構築するためにも、また、文芸と報道がない交ぜとなった新聞黎明期のメディア空間の様相を明らかにするためにも、明治期実録の研究は必要不可欠である。以上が本論の問題意識である。

序章では、本研究の背景と、先行研究の問題点を整理し、問題解決の方法を提示する。現行の実録研究は、明治期実録に固有の性格を未だ明らかにできてはいない。明治期実録は、江戸時代には存在しなかった新聞メディアによる報道記事を基に編まれており、少なくともこの一点において、近世実録とは明確に異なる。そのため、本論は、明治期実録の中でも新聞メディアと密接に関わった〈士族反乱実録〉に注目する。また、新聞報道記事との比較と検討を通じて、本文の特性を洗い出すことが明治期実録研究の基本的な方法であることを提言する。

第一章では、明治九年の士族反乱報道の推移に実録刊行の動きを重ねることで、新聞報道の量的・質的不足を補うために編まれた、新聞の補完的読み物という明治期実録の特性を明らかにしている。また、明治期実録が「終わりのある物語」を意図して編まれてはいないことを指摘し、その点に時事報道的な読み物としての性格を見ている。また、それを現存の〈士族反乱実録〉の半数が途中で刊行を打ち切っているという書誌学的側面から裏付けている。

第二章では、明治九年の士族反乱をもっとも早く描いた『熊本伝報録』と新聞記事との比較研究を通して、明治期実録のメディア的側面を考察している。具体的には、読売新聞社が、新聞報道をまとめた〈士族反乱実録〉という新しいジャンルの読み物を世間に紹介して、新たな新聞読者を開拓しようとした可能性について指摘し、新聞黎明期における新聞の読者の拡大に〈士族反乱実録〉も一役買った可能性があることを示している。

第三章では、絵入新聞社刊行の『西国戦争日誌』を取り上げて、未だ不透明な、挿絵と新聞「論説」欄の引用という問題について具体的事例を積み上げて考察している。その考察を通して、信憑性に欠け、かつ士族反乱における政府の失態を隠蔽する情報を、同書はあえて記していることを明らかにした。さらに、同書奥付の「売捌所」一覧に新聞紙上で積極的に政府擁護を行っていた郵便報知新聞社の名前も確認されることなどから、従来は「際もの」と見られて

きた〈士族反乱実録〉の中には、政府擁護という政治目的の下に刊行されたものもある可能性を示した。

第四章では、一読して強い政治色を帯びていることがわかる『西国暴動録』と新聞との比較を通じて、新聞「投書」欄の文章も意識しながら編まれていることを明らかにしている。その上で、同書が、「論説」欄や「投書」欄に掲載された政府批判を無効化するような編集になっていることを指摘し、明治期実録にも、「国民化」を促した新聞メディアと同じように、読者を一定の方向に導く可能性があることを問題化している。

第五章では、〈士族反乱錦絵〉を取り上げて、錦絵も新聞記事に基づいて描かれたものであることを実証的に分析している。画工たちは戦場に赴かず想像で描くため、絵には虚構も入りまじるが、その虚構化において、「賊徒」を忠孝などの徳目を備えた歴史物語上の人物になぞらえて描こうとする点に想像力の働きの特色があることを指摘している。また、明治10年代になると、錦絵の「賊徒」たちが、「異種百人一首」というジャンルの読み物の中で人々の人気を集めてゆくことを指摘する。錦絵研究の領域では、忠孝の画題は明治10年代になって新たに見出されたものとされるが、忠孝の主題は、美術界に限らず広く出版界において注目されたものであったこと、そのきっかけは士族反乱と実録・錦絵の刊行にあったとの解釈をしている。

終章では、各章のまとめを記し、今後の展望を述べている。従来研究自体が少なかったとはいえ、〈士族反乱実録〉は文学の領域が、〈士族反乱錦絵〉は美術の領域がフォローすべきものとして捉えられがちであった。しかし、本論は、両者がともに新聞記事に基づいて編まれている以上、旧来の文芸の様式が新聞という新たなメディアと融合した文芸メディアとして積極的に再検討すべきことを主張する。その研究は、文学や美術といった専門領域を超えた共同研究を要請していると提言する本論文は、たんに実録研究の深化というだけでなく、より広い視野からの検討を見据えた研究の試みになっている。

なお、資料編として、新資料『ひらかな（熊本／山口）賊徒追討録』の翻刻と、論者が蒐集した「西南戦争錦絵」一覧が付されている。この資料も今後の研究に裨益するところ大である。